

望まぬ妊娠・出産の心理学的背景(Ⅱ)

— 母性意識育成の視点から —

(分担研究：被虐待児予防の保健指導に関する研究)

花沢成一¹⁾、横田正夫¹⁾、和田佳子¹⁾、粟飯原真弓²⁾、林マツノ³⁾

要約：児童虐待のハイリスク因子としての「望まぬ妊娠・出産」が、褥婦の児に対する感情や母性意識との関連でどのように捉えることができるか、また虐待予防としての対児感情や母性意識の育成は、どのようにしたらよいかについて検討した。望まぬ妊娠・出産についての質問紙への褥婦の回答と、対児感情との関係を分析したところ、望まぬ妊娠・出産をした褥婦は児に対する愛着的な接近感情は低く、伝統的な母親役割を肯定する母性意識(母性理念)の低い傾向が明らかにされた。このことから妊娠期において対児感情や母性理念を育成することの重要性が示唆された。

見出し語：望まぬ妊娠・出産、対児感情、母性意識、母親学級、妊婦カウンセリング

【研究目的】

虐待のハイリスク因子としての「望まぬ妊娠・出産」が、実際に虐待とどのように関わるものかを明らかにすることを目指した研究として、昨年 は妊婦の児に対する感情(対児感情)や妊婦自身の感情との関係、あるいはロールシヤツハ・テストによる検討も試みた。その結果として、対人的関心や対児感情さらに自分自身の感情状態が、望まぬ妊娠と関連の深いことが確認された。ただ、これまでは「望まぬ妊娠や出産」を妊娠動機あるいは妊娠モチベーションの視点で捉えてきたが、望まぬ妊娠・出産には他の要因が存在することも

今までの調査の中で認められた。それは例えば妊娠前あるいは妊娠中に期待しなかったような児が出生するとか、男児を望んだのに女児を妊娠したとかいうような場合である。これらも望まぬ妊娠や出産と考えられるであろう。五体満足な子を望むのは親心であるが、実際に誕生した子は親の期待に反する場合がしばしばあり、このときの親の失望感は当然のことではある。しかし、この情動体験が、後の児に対する拒否的・攻撃的行動へと連なることがある。

本年度の研究は、「望まぬ妊娠・出産」をこの

¹⁾ 日本大学文理学部 (Dept. of Psychology, Nihon Univ.)

²⁾ 賛育会病院助産婦学校

³⁾ 日本赤十字愛知女子短期大学

ような見地でとり上げて、対児感情あるいは母性意識との関係を検討することによって、とくに妊娠期における妊婦を対象としての虐待予防策のための基礎的知見を得ることを目的としておこなったものである。

【研究方法】

1. 調査の対象

本研究は質問紙調査法によったのであるが、調査の対象は、東京都内の賛育会病院産科、名古屋市内の名古屋第一赤十字病院産科、群馬県内にある産科病院で分娩して入院中の褥婦 247名（初産婦 131名、経産婦 116名、平均年齢29.1歳）を対象として、質問紙の記入を依頼した。調査期間は1995年 9月～11月である。

2. 使用した質問紙

本研究のために作成した質問紙を使用した。これは3部で構成するものとした。第1部は母性理念を知るための27項目からなっている。母性理念は、母性意識とほぼ同義と考えてよい。母性意識には、自分は母親になるのだという母親自覚と母親としていかにあるべきかという理念の両方の意味が含まれているが、母性理念はこのうちの後者をいう。27項目のうち18項目は、伝統的な母親役割を肯定している内容のものであり、他の9項目は伝統的な母親役割を否定しているものである。内容例は〔表2〕以下に見るとおりであり、回答は「非常にそう思う・そう思う・どちらともいえない・ちがう・非常にちがう」の5段階とした。

第2部は、対児感情評定尺度である。これは昨年度、とくに一昨年度の報告書で詳細に説明したので、ここでは省略する。ただし、昨年度の回答

結果の分析から、回避感情項目のうちの2項目を入れ替えた。全体的にはほぼ同じものである。

第3部は、現在の妊娠・出産についての質問であり、つぎの6項目からなっている。

(1) 今度の妊娠・出産を、あなたは望んでいましたか。

(非常に望んでいた 望んでいた あまり望んでいなかった まったく望んでいなかった)

(2) 妊娠中に、どちらかというとならぬどちらの赤ちゃんが生まれてほしいと思っていましたか。

(男児 女児 どちらでもよかった)

(3) 実際には、どちらが生まれましたか。

(男児 女児)

(4) それについて、あなたはどのように感じましたか。

(非常に嬉しかった 嬉しかった がっかりした 非常にがっかりした)

(5) 赤ちゃんの体重について、あなたはどのように感じましたか。

(予想どおりの体重だった 予想より重かった 予想より軽かった)

(赤ちゃんの出生時の体重は_____だった)

(6) 下の事項について、あなたは妊娠中にはどのような赤ちゃんを望んだか、そして出産後に赤ちゃんを見て、どのように感じたか自由に書いて下さい。

(肌の色 肌の感じ 体の大きさ 頭髪のぐあい 顔つき 泣き声)

【結果】

A. 妊娠・出産の希望と母性理念

まず、妊娠・出産を望まなかった人の母性理念について調べた。今度の妊娠・出産を非常に望ん

でいた人と、望んでいたと答えた人とを合わせて「望んだ」群とし、その他を「望まぬ」群として母性理念得点の平均を比較したものが〔表1〕である。母性理念得点とは各項目への回答として、非常にそう思う +2、そう思う +1、どちらともいえない 0、ちがう -1、非常にちがう -2として、肯定項目(肯定得点)と否定項目(否定得点)との別で採点したものである。〔表1〕に見るように「望まぬ」群は伝統的母親役割を肯定する得点が低くなった。(否定得点は逆の傾向となったが、これは得点自体が低いためと思われる)。これを母性理念各項目についてまとめたものが〔表2〕である。この表では回答のうちの非常にそう思う(非常に)と、そう思う(そう)の

二つだけをとりあげた。この表で、3は否定項目なので「望まぬ」群の肯定率が高くなっているが他の項目は「望んだ」群のほうの肯定率が有意に高くなっている。すなわち妊娠・出産を望まぬ人は、伝統的母親役割を否定する傾向の強いことが分かる。

B. 妊娠・出産の希望と対児感情

つぎに対児感情について見ると、これも〔表1〕が示すように、児に対する愛着傾向をあらわす接近得点は「望んだ」群のほうに有意に高いことが分かった。回避得点は有意差ではなかったものの昨年度と同じように妊娠・出産を「望まぬ」群は児を否定する回避傾向が認められた。両感情が拮抗している傾向も見られた。

〔表1〕妊娠・出産の希望と母性理念・対児感情得点

群	母性理念				対児感情					
	肯定得点		否定得点		接近得点		回避得点		拮抗指数	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
望んだ	12.4	8.08	2.5	3.39	28.3	6.57	4.4	3.95	17.6	19.90
望まぬ	7.9	8.98	1.0	3.06	25.3	6.72	6.5	3.72	27.1	14.91
t検定	P<.01		P<.05		P<.05		NS		NS	

〔表2〕妊娠・出産の希望と母性理念項目への肯定回答率

項目	群	N	非常に	そう	χ^2 検定
3. 妊娠した自分の姿は想像するだけでみじめである。	望んだ	220	0.0	0.0	P<.05
	望まぬ	25	8.0	28.0	
7. 女は産むことで自分の生きた証拠を残すことができる。	望んだ	220	6.1	34.0	P<.01
	望まぬ	25	0.0	16.7	
10. 産んで育てるのは社会に対する女の務めである。	望んだ	220	8.2	24.5	P<.01
	望まぬ	25	4.0	4.0	
11. 女は子どもをもつことで人生の価値を知ることができる。	望んだ	220	10.9	36.2	P<.01
	望まぬ	25	0.0	24.0	
17. 子どもがいることで家庭生活はより楽しくなる。	望んだ	220	45.2	47.1	P<.01
	望まぬ	25	29.2	52.0	
19. わが子の成長を見とどけるために長生きをしなければならない。	望んだ	220	32.7	52.3	P<.01
	望まぬ	25	12.0	40.0	

C. 児の性別への期待と母性理念・対児感情

生まれてくる児の性別については、親であればだれでも関心をもつものである。現代は妊娠中に超音波断層法によって胎児の性別は早く知ることができるものの、生誕した赤ちゃんは男女どちらであるかによって、親のみならず家族の情動や態度

に影響を及ぼすことがある。これが虐待へのハイリスク因子にもなると考えられる。

そこで本研究では、胎児・新生児の性別への望みや、その結果に伴う母親の情動について検討を試みた。はじめに、性別への期待にそったかどうかという結果に伴う褥婦の情動として、性別への

[表3] 児の性についての期待感と母性理念・対児感情得点

群	母性理念				対児感情					
	肯定得点		否定得点		接近得点		回避得点		拮抗指数	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
うれしかった	12.5	7.91	2.5	3.38	28.1	6.69	4.6	4.02	18.4	19.78
がっかりした	5.2	8.87	0.6	2.73	27.6	5.85	5.5	3.52	22.6	18.66
t検定	P<.01		P<.01		NS		NS		P<.05	

[表4] 児の性についての希望と母性理念肯定項目への回答

項 目	群	非常に	そう	χ^2 検定
1. 妊娠は女にとって、すばらしい出来事である。	どちらでも性別を希望	51.7 31.0	41.6 58.6	P<.05
2. 赤ちゃんを産むことができるのは女の特権である。	どちらでも性別を希望	46.1 32.7	44.9 50.0	P<.05
8. どんなことをしても赤ちゃんは母乳で育てるべきである。	どちらでも性別を希望	4.6 0.0	23.9 6.9	P<.05
10. 子どもを産んで育てるのは社会に対する女の務めである。	どちらでも性別を希望	3.4 0.0	28.1 10.3	P<.01
13. 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である。	どちらでも性別を希望	2.2 0.0	33.7 20.7	P<.05
16. 子どもを産んで育てなければ女に生まれた甲斐がない。	どちらでも性別を希望	5.6 1.7	21.4 5.2	P<.01
17. 子どもがいることで家庭生活はより楽しくなる。	どちらでも性別を希望	51.7 34.5	46.1 53.4	P<.05

[表5] 児の性についての希望と母性理念否定項目への回答

項 目	群	非常に	そう	χ^2 検定
3. 妊娠した自分の姿は想像するだけでみじめである。	性別を希望 どちらでも	31.5 19.0	48.3 55.2	P<.05
9. 予定していない妊娠の場合、人工中絶もやむをえない。	性別を希望 どちらでも	10.3 6.9	24.1 12.1	P<.05
12. 結婚生活を楽しむためには子どもをつくらないほうがよい。	性別を希望 どちらでも	29.6 15.5	48.9 46.6	P<.05

期待と関係なく嬉しかったという群(230名)と相違したのでがっかりした群(15名)との母性理念得点平均を比較したところ、[表3]のように、肯定得点は嬉しかった群のほうが有意に高くなった。否定得点は逆の結果であるが、これはSD値が大きくなっていることからいえるのだが、否定得点の算出法の欠点に由来することでもある。

なお[表3]には、両群の対児感情得点を比較した結果を掲げた。この表が示すように、拮抗指数は「がっかりした」群のほうが高得点になっているものの、接近得点と回避得点では両群間に有意な差は見られなかった。

つぎに児の性についての望みで、男女「どちらでも」よいという群(101名)と、男女どちらかの「性別を希望」した群(89名)との母性理念肯定項目への回答傾向を示したものが[表4]である。この表で分かるように、この表に掲げた肯定項目の全てにおいて、「どちらでも」群のほうが肯定的回答が有意に多くなっている。とくに「8. どんなことをしても赤ちゃんは母乳で育てるべきである」「10. 子どもを産んで育てるのは社会に対する女の務めである」や「16. 子どもを産んで育てなければ女に生まれた甲斐がない」などは、どちらでもよい群のほうが多く肯定している。このように伝統的母親役割を肯定している褥婦のほうが、児の

性別については、どちらでもよいと思っている傾向をうかがい知ることができた。

[表5]は、母性理念否定項目のうちで有意な差が両群間に見られた3項目のみをとりあげたが、いずれも男女どちらかの「性別を希望」した群のほうが、否定項目を強く肯定している傾向が認められる。これは肯定項目の場合とまったく逆になっている。例えば「9. 予定していない妊娠の場合、人工中絶もやむを得ない」を肯定している人は、「性別を希望」群の34.4%に対して、「どちらでも」よい群は19%と少ないのである。他の否定項目も、有意な差とはいえなかったものの、同じような傾向が認められた。

D. 児の体重への期待と母性理念・対児感情

質問紙第3部の質問項目の中に、赤ちゃんの体重についてどのように感じたか、という質問がある。回答によって「予想より軽」かった群、「予想どおり」だった群、「予想より重」かった群の3群に分けて、母性理念と対児感情の各群得点平均を比較したところ「表6」のようになった。

どの得点も、三群間に有意な差は認められなかった。新生児の体重についての予想や期待が当たったり、はずれたりすることと、褥婦の母性理念や対児感情との間には、あまり関連はないとしてもよいと思われる。

[表6] 児の体重についての期待感と母性理念・対児感情得点

群	母性理念				対児感情					
	肯定得点		否定得点		接近得点		回避得点		拮抗指数	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
予想より軽	11.6	8.46	2.3	7.95	28.0	6.85	4.9	3.99	19.7	20.97
予想どおり	11.1	8.40	2.0	3.65	27.9	6.49	4.9	3.92	19.7	18.30
予想より重	12.4	8.63	2.8	2.81	28.5	7.20	4.9	4.17	20.3	25.55
F検定	NS		NS		NS		NS		NS	

E. 児の外観への期待

質問(6)は、妊娠中に期待した赤ちゃんの身体的な外観が、出生後の実際はどのようであって、そのずれをどのように感じたかをたずねたものである。

まず、予想したとおりという回答がどうだったか調べたところ、「肌の色」については35.0%であり、「肌の感じ」は48.2%、「体の大きさ」については26.2%、「頭髪のぐあい」は24.2%、「顔つき」では26.0%、「泣き声」については34.2%であった。

これら予想通りだった群と予想に反した、とくにネガティブな内容で予想に反した群とに分けて母性理念と対児感情について検討したところ、これも明確な差といえるような結果が得られなかった。この点については、母親の児に対する態度形成の一要因になると予想されることもあるので、分析法を改めて今後さらに検討を続けたいと考えている。

【虐待予防への対策】

本研究の目的の第一は、望まぬ妊娠や出産をした妊産褥婦が将来、自分が産んだ子を虐待する親にならないようにするための支援策を考えることにある。昨年度も同様の目的をもって研究をおこない、報告書に私見を加えたが、本年も調査結果に基づいての所見を述べて、考察にかえたいと思う。ここでは、とくに児が男女どちらの性であって欲しいかという親の期待があったとき、その期待にそわなかった場合の親の失望が、虐待に結びつかないようにする事前の対策について考える。

(1) 母性意識を育成する母親学級

いわゆる母性意識は、母親自覚と母性理念とに分けて考えられることは前述のとおりだが、ここ

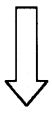
ではこれらを統合した意味で、この言葉を使用する。母性意識は、女性の生育史のなかで形成されるものではあるが、妊娠期の40週の間、育児との関連で望ましい方向に育てることは、決して不可能なことではない。経験や学習によって形成されたものであるから、たとえ短期日ではあっても再学習によって発達することが期待できる。

妊娠期における学習の場として、もっとも利用しやすいのは、母親学級ではないかと思う。近年は、両親学級や父親学級などと一緒に、あるいは平行しておこなわれることもあるが、妊婦の母性意識の教育の場として考えるので、母親学級だけをとりあげる。

現在の母親学級の多くは、妊産褥保健管理の視点で、妊娠・出産の生理あるいは育児についての知識や技法について教育する場となっている。一般に、妊娠中に4回と時間的に少ないこともあつて現在ではこれで手一杯というのが実情ではあるが、大部分の妊婦が受講する絶好の機会であるから、カリキュラムの改正や受講時間の延長などを図って、母性意識の目覚めと発達を目指した内容の講義や実習を加えるべきである。

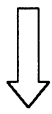
(2) 対児感情を育てるカウンセリング

母親の児に対する感情を母性愛という本能的視点でとらえるのではなく、愛着的感情と拒否的感情との相克の間にさまよう母親の体験と理解しようという意見については、昨年度の報告書で説明した。現在では看護教育や助産婦教育でも、カウンセリングや母性の心理学は必須の科目である。妊娠期におけるカウンセリングは、対児感情を育てることで虐待親の発現を予防するための重要な妊婦支援策であることを強調したい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:児童虐待のハイリスク因子としての「望まぬ妊娠・出産」が、褥婦の児に対する感情や母性意識との関連でどのように捉えることができるか、また虐待予防としての対児感情や母性意識の育成は、どのようにしたらよいかについて検討した。望まぬ妊娠・出産についての質問紙への褥婦の回答と、対児感情との関係を分析したところ、望まぬ妊娠・出産をした褥婦は児に対する愛着的な接近感情は低く、伝統的な母親役割を肯定する母性意識(母性理念)の低い傾向が明らかにされた。このことから妊娠期において対児感情や母性理念を育成することの重要性が示唆された。